9/20
朝日

思い届いたか

安保法制反対 座り込み5日間

リポート「福井」

国会から遠く離れて県庁前とJR福井駅広場とで、安保法案反対の座り込みが18日まであった。数万人単位で集った都心行動の規模にも遠く及ばず、数人～60人の意思表示だった。ささやかな取り組みにどんな意味があったのか。定点観測的に全日程を取材し、考えた。

JR福井駅東側での座り込み行動は14～18日の5日間、50～60人が座ったり歌ったりして訴えた

もどかしさも

駅広場の参加者が口々に訴えた。「戦場に行くのは私ではなく、歩いている皆さんです」(68歳の男性)。「歩いている皆さん、友人や恋人が殺し殺されるかも知れないと想像して欲しい」(47歳の男性)

60代以上が多い参加者。その周りを通りすぎていく人々。雨はひとしく降りそそいでも、見ている風景は違うのか。とくに若者よ、一緒に声をあげてくれ。そんな思いが訴えににじむ。

もどかしさを最も感じていたのは在日コリアン3世の女性(33)だったかもしれない。日本で生まれ育った。朝鮮籍だから選挙権はない。「意思表明の手段としてここにいます。私にはこれしか方法がないんです」「兵器で守られる『平和』は本物ではありません。私は国民ではないけれど友人として国民の皆さんと力をあわせたい」。子どもを迎えに行く前に立ち寄って握ったマイクの声は、切々たる響きがあった。

一緒に声あげて■社会考える契機に

「いる」意味は

福井市の女性(39)は3日間、参加者の輪や列の端にいた。こうした集まりに参加するのは初めてだ。

座って気づいた。通りすぎていく人はただ通りすぎているのではなく、自分と目を合わせないようにしていた。会釈する人もいた。「何かしらの思いはある。でも出せない。その気持ち、分かる。私もそうだから」。伏し目がちの表情はその人なりの表現だと思った。

元教諭の女性(67)は座り込みの最中、多くの人が国会を取り巻いた60年安保を思いうかべた。当時は意味が分からなかった。

「そういうことがあったな」と心の片隅に残ったことが、55年後の今の行動につながった。「あれがなければ立つことはなかった」

誰かによる何かしらの行動は、見ている人の心で残像となり、いつの日にかへとつながることもある。

女性は道行く若者に呼びかけた。「私たちの声を耳の片隅に、姿を目の端っこに入れておいて欲しい」

生活か政治か

「戦争は残酷だ」「日本を守ってきたのは憲法9条」――。そうした主張が続くなかで男性(66)の訴えは少し異質だった。法案の行方に無関心な未婚の息子を残念に思いつつ「今の若者は政治に関心を持てないほど苦境に置かれているのだろうと反論できなかった」という趣旨だった。

福井市の男性(32)はこの言葉が心に残った。いまは求職中という。座り込みに毎日来ているけれど「自分はこんなことをしていていいのか」とつぶやいた。他の参加者は仕事や家庭がしっかりあって、その上で来ている。それなのに自分は……とも言った。

平和でなければ普通の生活はできない。その普通の生活さえままならない自分にとって、「平和」とは何か。「生活と政治参加、二つやればいい」と相談した知人に言われた。そうだけれどそう簡単でもないんだよと男性は考えながら、見まわした。

市民団体・政党・労組の関係者がいた。その枠ではくくれない会社員、赤ちゃんを抱いた女性らの姿もあった。現行の政治に異議申し立てすること自体をさげすむ人がいるとも知った。

「では、これから自分はどうしよう」。社会との関係を考える契機となった座り込みは、この男性にとって有効だった。

(下地毅)

坂井市の石森修一郎さん(68)らは10～18日、午前6時から深夜まで1日18時間、「断食祈念行動」として県庁前で座り込んだ